

大地へ舞い降りる柔らかな光の粒が春の息吹を予感させるこの佳き日に、私たち六〇回生は千種高校を卒業します。本日は、私たちのためにこのような華やかな式を挙行していただき、ありがとうございます。また、お忙しい中ご臨席賜りました皆様に、心より感謝申し上げます。

三年前は広すぎるように感じたこの場所も、今ではすっかり慣れ親しんだ日常となりました。千種高校の外に広がる未知の世界を想像すれば、自然と胸は高鳴ります。一方、これからは一つ一つの選択が、より大きく自分の人生に関わるのかと思うと、漠然とした不安も拭えません。

では、私たちがこの三年間に築き上げてきたものは一体何だったのでしょうか。美しいだけの思い出でしょうか。いや、きっと違います。私たちはここで、何もない場所に自分の進みたい道を見つける方法を、その道を自ら歩む強さを身につけてきました。その過程で感じた心の動きは、私たち一人一人にしか分かりません。だから、今ここで振り返る必要があるのです。いつか、それが自分の内に輝く道標となるように――

千種高校の代名詞、学校祭。それは、いくつもの困難や挫折を仲間とともに乗り越えて全員が輝く、特別な時間でした。

一年生。初めての展示制作は、「自分たちは何を伝えたいのか」という問いから始まりました。決められた選択肢はなく、自分たちと向き合いすべてを自らの手で紡いでいく経験は、それまでの学校生活にはないものでした。

二年生。寂しい展示作業が増えました。入学当初は近くにいた仲間が、部活動に生徒会活動にと、それぞれ別のことに力を注ぐようになっていたからです。展示は完成し達成感もありましたが、互いにわだかまりを残して終わってしまったように思います。

そして三年生、最後の学校祭。演劇では、全体の流れとそれぞれの役職の相互連携が不可欠です。しかし、目指すもの、進め方、課題の受け止め方、あらゆる場所で意見のすれ違いが起こり、自分の思いをうまく伝えられないやるせなさに、悔し涙をのむこともありました。それでも、諦めるわけにはいきません。できることから、完成までの道を模索していきます。準備を進める中で課題が見つかる、ごく自然に仲間と相談をもち掛け、徐々に話し合いの輪が広がり、一人の発言が他の誰かのアイデアを呼ぶ。そんな協働を繰り返すうちに、熱量や目指す方向が共有され、クラスが一つの空気に包まれていく……言葉では言い表せないほど、満ち足りた時間でした。

前日まで修正を続け、何とか迎えた上演当日。本番直前は、布に段ボールにメイク道具にと、教室中に散らばるクラス演劇の欠片を背景に、役の衣装に身を包むキャスト、最後の打ち合わせをするスタッフの姿が堂々と映っていました。いよいよ本番。緊張と、最高の仲間と創り上げてきた自慢の作品をたくさんの人に見てほしいとはやる気持ちとが、私たちの胸の鼓動を速めました。ありったけの思いを台詞に、歌に、ダンスに込めて全身で表現し、汗を流しながら大道具を運び、こだわり抜いた音響も照明もすべてが一つになった五十五分間。鳴り響く拍手、全身に染み渡る達成感、仲間の笑顔、そして涙——いつまでも鮮やかに思い出すことでしょう。

学校祭は私たち、個として全体の中で動き、他者と協力する方法を教えてくださいました。この大きな行事は、クラスで、学校全体で形にするものだと頭では理解していても、一人一人異なる思いを一つにすることは困難でした。議論を交わす間にも、どこかで自分のほうが正しいと思い込んでいたのかもしれませんが。おそらく、二年生の展示制作で感じたわだかまりの原因はここにあったのでしょう。しかし、最後だからと意気込んで始めた三年演劇で、この見えない壁は一気に崩れ去りました。それまで部活動や生徒会活動に注いでいた熱やそこで培った視点をクラスにもち寄った級友の背中が、とても大きく見えたのです。知ろうとしていなかっただけで、一人一人がそれぞれの方面で努力を重ねてきたのだと気づくと、そんな仲間に心からの尊敬の眼差しを向けないわけにはいきませんでした。この「尊重」の姿勢をもって初めて、自分の芯をもちながら、全体のために自分がどう動けるかを考え、素直に仲間を頼ることができたのだと思います。互いに尊重し真に手を取り合ったとき、そこから生み出されるエネルギーと充足感は弾け輝き、大きなものを築くことができる——このことを知った私たちは、人との輪を広げながら、壮大な夢にも臆さず進んでいく強さをもったと言えるでしょう。そしてまた私たちは、人との関わりの中にだけでなく、これから先自分と向き合っていくうえで大切にしたい考え方も学びました。

千種高校には、勉強に限らず、部活動や生徒会活動など、自分のやりたいことを自らの手で形にできる場所があります。自由に描いた夢に向かって自分の身体を動かすのです。自分に与えた小さな挑戦を攻略する日々は、とても充実していました。しかしだからこそ、その過程で味わう挫折は、想像以上に苦しいものでした。自分で決めたことだから、行き詰まったとき、やり場のない自己嫌悪が胸にのしかかる。でも、目標を達成するために歩き始めた道だから、逃げたくない——理想とは程遠い自分を見つめ、前進も後退もできないままいたずらに時は流れ、やりたかったことすら見えなくなったとき、自分を否定してしまうことがどうしようもなくつらかった。そんな自分の痛みを寄り添ってくれる友達がいました。その優しさに、涙があふれて止まらないこともありましたが、でも、心は軽くなっても晴れないままなのです。必死にもがき考え続け、私たちはやっと一つ、自分に足りないものに気がつきました。それは、自分を信じる勇気です。そう思っても、自分を信じることに諦めることの

区別は難しく、葛藤はしばらく続きました。しかしふとした瞬間に、理想とは異なるありのままの自分を受け入れる感覚が胸を落ちていったのです。そこで初めてあの苦しい時間は、自分と向き合うために必要なものだったのだと分かりました。

この葛藤は、自分の夢に向かって自ら選んだ道を進む限り、ずっと付き合っていくものだと思います。夢はいつでも、まだ見ぬ可能性の中にあります。だからつい、自分の目標が浮かぶ未来を見つめて今との距離を測り、つらいと嘆くばかりになってしまうかもしれません。そんなときこそ、千種高校で駆け抜けた日々を思い出すのです。理想と現実とのギャップに悩んでいるとき、何もしていないわけではなかったはずです。むしろ、頑張っているから苦しかったのではないのでしょうか。今を丁寧に生き、未来の可能性を切り拓く。今できることに全力を尽くし、後から振り返って過去の選択が自分の身になっていると信じられる——千種高校で過ごした三年間が、過去と今、そして未来を結び付け、自分を肯定して生きる道の大切な始まりであったことを胸に、これからの人生を紡いでいくのです。

最後になりましたが、先生方。私たちの無謀とも言える挑戦は、間違いなく先生方あってこそのものでした。先生方はきっと、まだ経験の浅い私たちに部活動や行事の運営を任せれば、かかる時間や問題が何倍にも膨らむことをご承知のうえで、千種高校の「生徒主体」の形を守ってくださっていたのだと思います。そうとも知らず、私たちは生徒の視点しかもたずに正義を振りかざし、真正面から反発してしまうことがありました。ごめんなさい。それでも、先生方は生徒を一人の人間として尊重し、その声に耳を傾けてくださいました。私たちが様々な体験を通して、人生の礎となる学びを自分の手でつかめるよう、広い心をもって私たちを見守り、そっと背中を押してくださった先生方には、感謝してもしきれません。先生方に支えられた千種高校での経験を誇りに思い、これからも自分を磨き続けます。ありがとうございました。

そして、家族。自分の限界をよく知らずに物事に打ち込むあまり、帰りが遅くなったり寝不足でいつもあくびをしていたりと、たくさん心配をかけました。そんな無茶な生活を三年間続けても元気でいられたのは、毎日あたたかいご飯を用意し、どれだけ反抗されても根気強く私たちの健康を気遣ってくれ、安心できる家を守ってくれたあなたたちのおかげです。脇目も振らずに走って視野が狭くなるあまり、こんなにも尽くしてもらっていることを棚に上げ、たくさんわがまを言ってしまっただごめんなさい。それなのにあなたは、目標に向かう途中でつまずき苦しむ私たちの痛みをただ受け止め、思い切り抱きしめてくれましたね。もうあれこれ手出しするのではなく、私たちが自分の力で変わろうとするのをじっと待つあなたたちの姿を見て、寂しさを感じると同時に、これからは自分の足で歩いていくのだと悟り、覚悟を決めました。優しく突き放してもなお、私たちを包み込むあなたたちの無償の愛は一生をかけて返し、また私たちの周りにも広げていきます。本当にありがとうございました。

在校生のみなさん。みなさんは、私たちの大切な大切な同志です。自分と向き合いながら正解のない道を進むことに疲れてしまったとき、みなさんの生き生きした煌めきに、歯を食いしばりまっすぐに目標を追いかける姿に、何度力をももらったことでしょうか。みなさんがいたから、初心を忘れず千種の自由を自分なりに形にする努力を続けることができたのです。自分で決めたことを自分でやり遂げようとするのは、時に確証がもてず不安になるかもしれません。これでいいのか、こんなことをして意味はあるのかと、自分を疑ってしまうかもしれません。でも、みなさんが夢を実現しようとする姿は、みなさんが自分で思うよりずっとずっと輝いています。私たちがそうであったように、多くの人に勇気を与えます。だから、成果を求めるより今を大切に生きてください。場所は変わっても、私たちはみなさんの同志として、ともに自分だけの答えを探し続けます。どうか、自分の心と身体を労って、千種高校での残りの日々を思う存分充実させてください。大好きです。

そして、六〇回生のみんな。近くで日々奮闘するあなたの勇姿を見ている私に、成長を止めるという選択肢はありませんでした。踏ん張りたい自分と、逃げ出したい自分の板挟みになって苦しいとき、あなたは私以上に私のことを信じてくれましたね。馬鹿みたいなことで笑い合い、ともに熱くなり、いつも隣を歩いているのかと思えば、真似をしたくてもなかなかできない唯一の魅力をもっている——尊敬するあなたが私を信じてくれたから、私も自分を認めてみようと思えました。あなたが私を頼ってくれたとき、心から誰かの力になりたいと願う気持ちを知りました。みんながいたから、私の三年間は色とりどりに染まり、今、明るい色も暗い色もそのすべてを愛することができるのです。本当にありがとう。そんな大切なあなたには、自分を好きでいてほしいと強く願います。これから待ち受ける困難に、自分自身を見失ってしまうことがあるかもしれません。でも、つらいときこそ自分を信じて。それが難しいのなら、ここにいる仲間が保証します。あなたは十分すぎるほど頑張っている。私たちがなくても、こんなにも素敵なおなただから、そのままの自分を見てくれる人は必ずいるはず。仲間の力を借りながら、最後にはありのままの自分を信じ、貫いてください。ずっとずっと大好きです。そしてこれからも、よろしくお祈りします。

自主自律の花ひらく学舎、千種高校。ここでつかんだ経験に、夢に誇りをもち、今を全力で生き、私たちは自分の人生を輝かせてみせます。そして最後に、千種高校が、千の色の夢であふれ、生徒の手によってその歴史を刻む場所であり続けることをお祈りして、答辞といたします。

令和七年 三月一日
卒業生代表 中野橙花